

第1回 旭川市民文化会館の在り方検討会 会議録（要旨）

会議名	第1回 旭川市民文化会館の在り方検討会
開催日	令和4年6月27日（月） 午後1時30分から午後3時35分まで
出席者 （敬称略）	参加者 全8名のうち7名出席 五十嵐 真幸，伊藤 誌麻，上田 信津子，鈴木 雄太， 竹田 郁，南 裕一，森 傑 オブザーバー 1名出席 伊藤 久幸（札幌文化芸術財団） 事務局 5名出席 社会教育部長，文化ホール担当課長，市民文化会館長， 市民文化会館主査，主任
会議の公開非公開の別	公開
傍聴者数	3名
会議資料	別紙のとおり

1 開会

2 社会教育部長挨拶

3 出席者紹介

4 進行役選出

参加者から選出方法等に係る提案がなく，参加者全員の下承をもって事務局に一任されたことから，事務局案として「森 傑」氏に依頼する旨を提案，参加者全員の了承を得て決定

進行役：

各自治体が保有する公共施設の多くは、この建物と同様、経済成長・人口がピークの50年前頃、一斉に造られたもの。そうした公共施設が一気に古くなっている一方で、人口や財政規模は縮小しており、その中でいかに持続可能な形で公共サービスを続けていくのか、ハードとしての建物をどう更新していくのか、ということの研究している。

一番単純な解決手段は、建替えであるが、全体としての数を減らさなければ人口規模に見合わないということと、建物を建てた経済成長の頃に前提としていた利用の仕方と異なる状況が生じており、これからの時代を見据えて、個別の建物を適正な規模・機能とするため、建物規模を再検討したり、複合化という形で相乗効果と合理化を図っているところが多い。

旭川市民文化会館に近い事例として、苫小牧の市民ホールは、PFIという手法を選択し、民間活力を活用した形で整備する手法で、今後建設が進んでいく。

大きな議論となったのは、苫小牧という街の場所と札幌との関係であり、興行や利用団体の方々が満足いく形で、かつ、オーバースペックにならないようどうするのかということ、市民ワークショップなど様々な形で検討して構想計画を立てていった。それを踏まえて今建設が始まっている。

この「旭川市民文化会館の在り方検討会」はもっと前の段階のため、直接そこと比較という話にはならないが、そういった経験を生かしながら、本会議の進行役として、議論に貢献させていただきたいと思う。

5 議事

進行役：

最初に、本日の議事概要について、事務局より説明をお願いします。

事務局：

まず、この検討会がどういったもので、どのような位置付けにあるのか、ということ、議事の「(1) 検討会趣旨説明」で御説明させていただく。

そして、「(2) 旭川市民文化会館の整備検討に係るこれまでの経緯について」では、旭川市民文化会館の整備の検討について、これまでどのような経緯を経てきたかということについて、概要を御説明させていただく。

その後、「(3) 旭川市民文化会館の建物・設備等の現状について」では、皆さんに実際に館内を回って設備などを見ていただき、当館の現状を把握していただきたいと考えている。

進行役：

最初に「議事(1) 検討会趣旨説明」について、事務局より説明をお願いします。

事務局：

資料1及び資料2に基づき説明

各参加者からの質問、意見等は特になし。

進行役：

次に、「議事（2）旭川市民文化会館の整備検討に係るこれまでの経緯について」、事務局より説明をお願いします。

事務局：

資料3、資料4、資料5及び資料6に基づき説明

進行役：

資料4の「2 文化会館の概要と利用状況」において、大ホールの利用率は65.6%であるが、全国の1,000席以上あるホールの平均57.1%より高いという表現がある。ここは結構大事なところであり、同じ稼働率でも、地域によって利用のされ方は全く違うと思う。旭川市民文化会館の利用状況に特徴などがあれば、事務局より補足願う。

事務局：

興行での利用もコンスタントにあるが、傾向としては地元の利用者が多く、中でも吹奏楽の利用が多い。そのほか、学校教育・部活動や文化団体など、市民活動で利用していただくことが中心で、地域に根差した文化の発信施設としての役割を果たしているものと考えている。

参加者：

利用率については、設営のために前日の夜間を予約している場合も計上されるため、数字だけに惑わされてはいけないと思う。

進行役：

自治体ごとに稼働率の考え方が違ったり、午前・午後・夜間の区分が違ったり、数字上には出てこないところが多々ある。今回の議題からは離れてしまうが、将来を考えると、実際にどのような使われ方をしているのかという部分で、統計的なデータ以外の情報もしっかり押さえないと、議論が進まないところがあると思う。

次に「議事（3）旭川市民文化会館の建物・設備等の現状について」、事務局より説明をお願いします。

事務局：

資料7に基づき説明

進行役：

御質問や御意見はないか。

参加者：

公会堂は、大規模改修を行った段階で、その後、何年程度使用する想定であったのか。

事務局：

一般的には20年程度使用するものと想定されるため、令和15年頃が目安となるが、現段階で決定しているものではない。

進行役：

このときに耐震改修も実施しているか。

事務局：

耐震改修を実施している。

進行役：

この後、実際に建物を見学していただき、その後意見交換させていただく。

(館内見学後、会議室に戻る)

進行役：

見学を経て、皆さんの感想をお聞きしたい。

参加者：

建物内の色々な所に高低差があると改めて気付いた。

また、ホールでは車椅子の場合、自由に席が選べず、仲間と一緒に行っても1人だけ違う席に座ることになってしまう。車椅子席の横の座席も一段上げれば同じ高さになり、一緒に観覧することができる。

車椅子の席数自体が少ないという問題もあるが、他の施設では、任意の座席を外して、そこに車椅子で入れる仕組みもあるので、そうした仕組みがあると良い。

大規模改修ではなく、ちょっとした改修でも、使いやすくなる場所もあるものと感じた。そのほか、少し難しい建物という感想である。

参加者：

とてもノスタルジックな建物で、苦勞しながら、大切に今まで使ってきていると感じた。

大ホールホワイエ1階の女性用トイレを見学したが、赤ちゃん用の椅子が一つもないため、母親が小さなお子さんを連れてトイレに行くことができない。また、女性用トイレにおしめを交換する台があっても良いと感じた。

参加者：

皆さんが苦勞しながら丁寧に使っていて、ここまで施設を維持されているものと理解した。

一方で、子どもが発表等で舞台に立つ側からすると、子供は少しでも何かあると怯えるので、安全な建物の中で、安心して演奏ができる環境を整備することが重要であると思う。

参加者：

今日見学してみて、新鮮に知らない知識が沢山得られた。新築・建替えのいずれの場合も、こうした取組を重ねることで市民も協力しようという思いになるし、観光客が、施設の裏側を見ることができるというのも良いのではないかと感じた。

また、大規模改修を行う場合に休館期間が発生する点については、これだけ大事な場所であることから、ここが使えないとなると興行やイベントなど大きな問題になってくることが想定され、どのように調整されるのかという部分が気になっている。

昨今、旭川市は「デザイン都市」を謳っている。ユニバーサルデザイン、誰にもやさしいということが1番大事であると思うが、もっと格好良くなればという思いもある。用事がなくても「行きたい」と思うような都市になれば良いと思う。

進行役：

休館期間について、事務局から関連するコメント等はあるか。

事務局：

大規模な改修となると、どうしても休館期間が生じてしまう。札幌市であれば代替施設があると思うが、旭川市の場合、そうした施設がない。

コンベンション的なものなど、大規模な催事は2年前くらいには開催が決定しているので、あらかじめ、そうした期間を踏まえて周知等を行う必要があり、難しいところである。

進行役：

夜間や施設の開館期間中の合間で、工事を実施する方法はどうか。

事務局：

長期にならないものについては、利用ができるだけ少ない時期に、あらかじめ周知して一定期間利用を休止するという方法で工事等を実施できるが、大規模改修となれば、数年前から準備・周知して行う必要がある。

進行役：

バックヤードツアーのような形で、市民文化会館を市民の方々に積極的に見ていただくようなイベントなどは、過去に実施されていたのか。

事務局：

小中学生向けのものは、毎年実施している。それに加えて、一昨年は参加者を公募し、今回のように施設の現状を見ていただくバックヤードツアーを実施した。

参加者：

改めて、格好良い建物であると感じた。また、小さな部分、直すところはたくさんあると思うが、皆さんが大事に紡いできた場所であるということも感じた。

個人的には、普段、ホワイエなど、受付や待機場所として使用する機会のほうが多いので、待機場所も含めて、デザインする必要があるものと思った。

参加者：

普段から使用しているので慣れてしまった部分もあるが、館長以下、スタッフの方々が本当に丁寧に、利用者が使いやすいように施設を管理していると思う。

例えば、ホワイエや通路の掲示なども、ここ数年で非常に分かりやすくなったし、すごく苦労していると思う。

その一方で、例えばどんちょうの件にしても、バトンや反響板にしてもであるが、主催者側としては、極端なことを言えば、何かあったら命に関わる問題である。

しかし、見に来るのが目的の利用者にとっては、掲示も直してくれているし、少し座席は狭いとか、トイレが少し古いなど感じることはあっても、「まだまだ使える」という感覚であると思う。この意識の違いというのは、おそらくこれから方向性の決定に向かって検討を進めていく際に、大きな課題になるのではないかと改めて感じた。

進行役：

先ほど「格好良い建物」という表現があったが、入口からホールを見た時や窓の開き方であるとか、座席もコンパクトに造っているが、一体感をどう持たせるか、「来られた方がどのようにこの建物を体感するのか」という部分で、非常に高い空間デザイン・空間計画をされている、計画設計当時としては、かなりハイレベルな建物という印象である。

しかし、築約 50 年ということでは、現在の基準に照らすと色々な課題が出てくる。全国の自治体でも、ホールの建替えというケースは多いが、いずれも同様に築 50 年程度の建物であり、不具合についても旭川特有の話ではなく、ごくごく一般的な話である。旭川市民文化会館が特段に悪い状態のホールということではなく、建設から約 50 年を経過した時代の建物としては、それ相当の不具合と、現代の視点では合わない部分が出ている、というのがこのホールの一つの特徴であると思う。そうした中で、今日お話をお聞きして、不足している部分をマンパワーをかけて、丁寧に維持管理していることが伝わってきた。

この約 50 年前の昭和の時代に作られた建物に共通の特徴として、どんな建物を建てても、長期修繕計画というものを全く立てていない。そういうものを持たずに、建てるだけ建てるというのが当時の時代性であった。昭和の建物には、そういう概念がないので、いかにメンテナンスしていくのかというのは、自治体の予算として組まれていない。よって、今まで大規模な改修がなかったというのは、そもそも建てたときに、修繕をするためのお金を用意していく、計画するという概念が、昭和当時には日本全国で存在していなかった。そのため、不具合が出てきたときに修繕するか、そのときにお金がなかったらごまかすか、ということをする。

本来、建物の物理的な強度でいえば、昭和の建築物でも、適切にメンテナンスしていれば 50 年は維持できる。耐震性など法律的な面もあるが、一般論的に建設から 50 年を経過している建物の多くは、そもそも長期の修繕計画を持たずに、何もしてこなかったという点で全国的に共通している課題である。

もう一点、現在では、鉄筋コンクリート、鉄鋼、木造など、どのような建物でも、物理的には 100 年以上維持できる。それと同時に、現代では、設計に際して「途中で用途が変わったときに、どのように変更できるのか」という柔軟性を当然のものとして持たせるのに対し、昭和の建物は、特定用途に特化した設計で、それ以外の用途が出てきたら、どうにもならないというのが時代性である。

旭川市民文化会館には、そうした「昭和の建物」の特徴がはっきりと表れていると感じた。

私自身は大学の研究室で、ユニバーサルデザインというか、インクルーシブデザインについて長年研究している。例えば車椅子を利用される方、視覚障害の方や聴覚障害の方、最近では、LGBTQの方々が、施設を利用する場合の研究・実践をしているが、最近では、トイレも男女という話ではなくなっている。

トイレ一つとっても現代の公共施設では、随分考え方が変わってきており、そうした部分についても、現状は運用の中で色々な工夫をして対応されているが、時代に即した対応にアップデートしきれていない課題もたくさんあると思った。

今回の会議では、今日の施設見学で気付いた点や考えも含めて、意見交換ができること、より生産的な会議になると思う。

皆さんの感想を伺ったが、他の参加者の話を聞いて思ったことや、ここを確認したいということがあれば、発言をいただきたい。

(他参加者より発言なし)

6 閉会